

蒼洋の城塞6

城塞燃ゆ

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之
地図・図版 安達裕章
編集協力 らいとすたつふ

目次

第一章 「信濃」竣工

9

第二章 パラオの再会

31

第三章 鉄壁の空

61

第四章 機動部隊死闘

97

第五章 砲声鳴り止むとき

157

第六章 連合国の選択

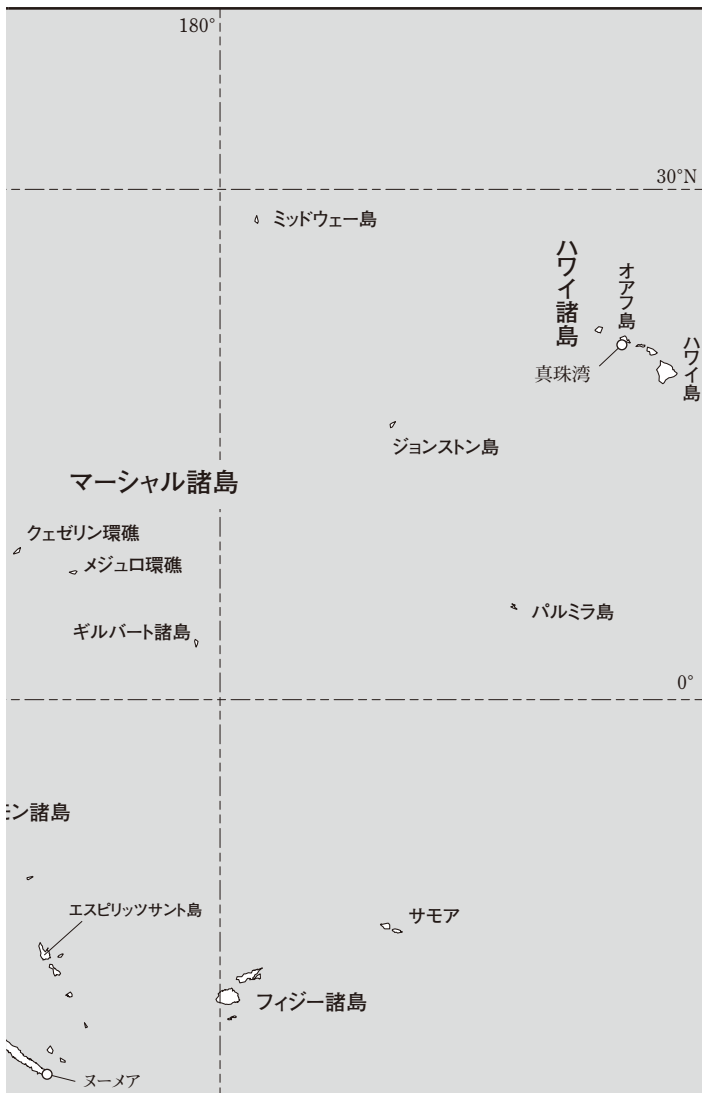
225

終章

239

あとがき

250



南西太平洋要図

150°E





蒼洋の城塞

城塞燃ゆ

6

第一章

「信濃」

竣工

1

その艦を、他艦と見分けるのは容易だった。

横幅が、非常に大きい。「加賀」や「赤城」——戦艦、巡洋戦艦を航空母艦に改装した艦と比較しても、際だって見える。

「長さはまだしも、横にでかいな。二機が並んで発着艦ができてうだ」

前原邦彦大尉は、艦上攻撃機「天山」の偵察員席から巨艦を観察して、そんな感想を漏らした。

「同感ですね。着艦するとき、たまに母艦を間違える阿呆がいますが、あの艦に限っては、そういう奴はおらんでしょう」

操縦員の鈴木武治少尉が言った。この五月、飛行兵曹長から少尉に昇進し、士官の階級を得ている。

「お前なら、目をつぶっても降りられるんじゃないのか？」

「やってみましょうか？」

「止めてくれ。洒落にならん」

苦笑して、前原は答えた。

鈴木が言うと、冗談に聞こえない。

日米開戦の前から艦攻の操縦員を務め、兵からの叩き上げで士官の階級を得たベテランなのだ。

真珠湾攻撃でも、珊瑚海における一連の攻防戦でも、グラマンの猛攻や敵艦の凄まじい対空砲火をかくぐって、雷撃を敢行している。

そのような操縦員の言葉には、冗談を冗談と感じさせない凄みがあつた。

前原機は高度を下げ、艦尾から真新しい母艦に接近する。前原が率いる一七機の天山が後に続く。

エンジン・スロットルが絞られ、前原機が飛行甲板に滑り込んだ。

着艦フックが制動索を捉え、機体が停止した。

飛行甲板の真ん中から見ると、艦の大きさを一層実感できる。二機どころか、三機が並んで発着でき

そうに思えた。

前原は、顔をしかめながら降機した。

照り返しが強烈だ。鉄板の上で、炙られているような心地がする。

二番機以降の機体が、次々と降りて来る。降機した搭乗員は、前原同様、暑さに顔をしかめている。

一八機の天山は、全機が無事に収容を終えた。

五四名の搭乗員が整列したところで、前原は艦長阿部俊雄大佐、飛行長志賀叔雄少佐に敬礼した。

「申告します。第六〇一航空隊第六大隊、海軍大尉前原邦彦以下五四名、『信濃』乗り組みを命ぜられました」

第六〇一航空隊は、第一航空戦隊の航空部隊だ。

所属する飛行機隊は大隊編制となり、各大隊毎に分かれて母艦に乗り込む。

前原は、今年三月のメジロ沖海戦まで、「瑞鶴」艦攻隊の中隊長を務めていたが、母艦航空隊の編制替えに伴って六〇一空への異動を命じられ、一個大

隊一八機の艦攻を率いる立場に昇格した。

前原の第六大隊は、大分航空隊で訓練を積んでいたが、八月一〇日、シンガポールのセンバワン飛行場に移動を命じられた。

そこで更に三週間ほど訓練を積んだ後、母艦の「信濃」に乗艦したのだ。

「御苦労。よく来てくれた」

阿部が答礼を返し、志賀飛行長も艦長に倣った。

「本艦は、帝国海軍の空母の中では最も大きいのが、発着艦の要領については、他の空母と変わりはない。米軍の大規模な反攻が予想される今、本艦の戦力化は急務だ。諸子が一日も早く、本艦に慣れてくれるよう希望する」

阿部の型通りの訓示に続いて、志賀が言った。

「現海面は、リング泊地の沖だ。パレンバン油田が近く、燃料の心配はない。決戦直前まで、思う存分、腕を磨ける。実戦は未経験という者も少なくないだろうが、決戦までに念入りに訓練を積み、技量

の向上に努めて貰いたい」

空母の飛行長には、艦爆か艦攻の指揮官経験者が多いが、志賀は艦戦隊の出身だ。

真珠湾攻撃では「加賀」の艦戦隊長を務め、珊瑚海における一連の攻防戦でも第一線で戦った歴戦の指揮官だ。

その志賀が、意味ありげな笑いを浮かべた。

たつぷりしごいてやるぞ。覚悟しておけ——その意が、言外に感じられた。

「大きな声では言えないが——」

そう前置きして、志賀は言った。

着任の挨拶をし、一旦解散した後、前原は飛行長室に来るよう命じられたのだ。

前原の他、艦爆隊を率いる第三大隊の松島公也少佐、艦戦隊を率いる第九大隊の小早川明剛大尉が顔を揃えていた。

「最も習熟が必要なのは、本艦の乗員なんだ。なにせ、竣工から三ヶ月しか経っていない。一万トン程度の小型空母ならまだしも、これだけの大型艦になると、乗員が艦に慣れるまでに時間がかかる。艦長も、『半年は訓練させたい』と言っておられたのだが」

「信濃」は、大和型戦艦の三番艦として建造が始まった艦を、途中から空母に変更した艦だ。

今年の六月四日に竣工し、その日のうちにシンガポールに向けて出港した。

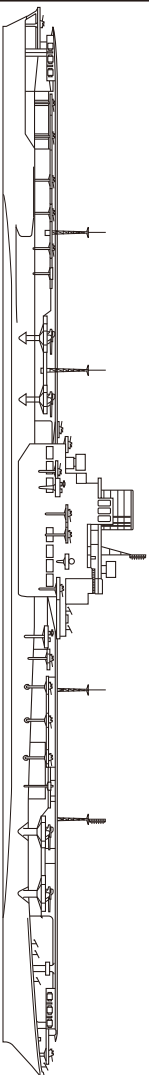
海軍上層部は、「信濃」乗員の錬成を急ぐため、燃料の豊富な南方での訓練を命じたのだ。

阿部艦長は水雷の専門家で、海軍生活の大半を艦船勤務で過ごして来た人物だという。

現場に精通している艦長であっても、「信濃」乗員二四〇〇名を、短期間で艦の扱いに習熟させるのは、難しいのかもしれない。

志賀は、言葉を続けた。

日本海軍 航空母艦「信濃」



全長	266.0m
最大幅	38.0m
基準排水量	62,000トン
主機	オールギヤー・タービン 4基／4軸
出力	150,000馬力
速力	27.0ノット
兵装	12.7cm 40口径 連装高角砲 8基 16門 12cm 28連装噴進砲 8基 25mm 3連装機銃 35基 25mm 単装機銃 40丁 常用78機／補用6機 2,400名
航空兵装	
乗員数	なし
同型艦	

本艦は、大和型戦艦の三番艦として起工されたが、米国との開戦が⁵決定的となった昭和16年11月、すべての艦艇建造計画の見直し⁶がわれ、本艦を含む大型艦の建造は中止が決定した。しかし、米国が大型空母多数を建艦中との情報を得たことから、戦艦ではなく大型空母として完成させることが決まった。

このとき、本艦はすでにタービンやボイラーの据え付けを完了していた。この状況からの改造ということで、艦政本部および横須賀工廠の設計部は不眠不休で作業を行い、昭和17年11月には工事⁷が再開されている。

昭和19年6月に竣工し、第一航空戦隊に編入。ただちに横須賀からシンガポールへ移動し、乗員の慣熟訓練を行いつつ初陣の日を待っている。

建艦途中からの改造ということもあり、艦の大きさの割に搭載機数は少ないが、大和型戦艦譲りの強力な防御力を誇り、戦場では不沈空母として機動部隊の中心的存在になろうと思われる。

「既に聞いていると思うが、本艦は『赤城』『加賀』と共に、第一航空戦隊を編制する。これに二航戦の『瑞鳳』『龍鳳』、護衛の戦闘艦艇を加え、機動部隊の第一群を形成する」

「うかがっております」

三名の大隊長を代表する形で、松島が応えた。

機動部隊の新体制については、前原も内地で聞かされている。

各航空戦隊のうち、奇数番号を正規空母の部隊、偶数番号を直衛専任艦となる小型空母の部隊とし、二個航空戦隊を組ませて機動部隊の一群にするというものだ。

第一群の他に、正規空母「大鳳」「瑞鶴」「翔鶴」から成る第三航空戦隊と、水上機母艦改装の小型空母「千歳」「千代田」から成る第四航空戦隊を組ませた第二群がある。

他に、戦艦改装空母の「陸奥」と商船改装の中型空母「隼鷹」「飛鷹」から成る第五航空戦隊がある

が、この部隊は組ませることが可能な小型空母の戦隊がないため、単独で第三群の中核となっていた。

「本艦は、洋上の前進基地として使用するという構想があつたと聞いておりますが」

前原は、志賀に疑問をぶつめた。

連合艦隊は、「信濃」を機動部隊の前方に展開させ、後方から進撃して来た味方機を一旦収容、燃料、弾薬を補給した上で、敵機動部隊に向かわせる、という作戦構想を立てていた

攻撃隊は行動半径の大幅な延伸が可能となり、味方空母の大半を、敵の攻撃圏外に置くことができる。発案者は、「味方の被害を最小限に留め、敵に大打撃を与える、必勝の戦策だ」と主張していたようだが――。

「それは画餅だとして却下された」

あつさりした口調で、志賀は言った。

「本艦は確かに大きいが、一度に降ろせる機数は、せいぜい五〇機といったところだ。たかだか五〇機

程度の行動半径を延ばしたところで、敵の大規模な迎撃を受ければ、殲滅される可能性が高い。攻撃隊を一旦収容し、補給を行っているところに、敵の攻撃を受ける危険もある。本艦は前衛とするより、他の空母と航空戦隊を組ませ、まとまった機数で敵を攻撃した方がよい、ということになった」

「本艦は、排水量の割に搭載機数が少ないように感じます」

今度は、小早川大尉が言った。

「信濃」は全長二六六メートル、最大幅三八メートル、基準排水量六万二〇〇〇トンの巨艦を持つ。

「赤城」「翔鶴」二艦の排水量に匹敵するほどのだ。

にも関わらず、搭載機数は、常用七八機、補用六機と、翔鶴型とさほど変わらない。

「信濃」であれば、搭載機数は一〇〇機を超えてもおかしくないのでは、と言いたいようだった。

志賀は、苦笑して応えた。

「排水量がでかいからといって、搭載機数を増やせ

るものでもないさ。本艦は、戦艦として建造が進められていた艦を、途中から空母に変更したんだ。格納甲板に使える艦内空間にも制限がある。最初から空母として設計されていれば、もう少し違ったんだろうが」

「おつしやる通りですね。珊瑚海で沈んだ『蒼龍』の排水量は、『信濃』の四分の一ですが、常用と補用を合わせて七三機を搭載できたんですから」

前原が頷いた。

六万二〇〇〇トン分の資材を使うなら、「信濃」一隻よりも「蒼龍」の同型艦を四隻建造した方が、遥かに多くの艦上機を運用できる計算だ。

「攻撃力だけを見れば貴様の言う通りだが、本艦には立派な長所がある。飛行甲板に防御装甲が施されており、五〇〇キロ程度の爆弾は跳ね返せる。水中防御も充実しており、魚雷一、二本程度の命中なら、速度もほとんど衰えることはない。第二次珊瑚海海戦の『蒼龍』の位置に本艦があれば、小破か中

破で切り抜けたはずだ」

志賀は、小さく笑った。空母の価値は、搭載機数だけではない、と言いたげだった。

「本艦は、飛行甲板に一発食らっただけで機能を失うことはない。『魚雷や爆弾を何発ぶち込まれても、最後まで戦い続けられる空母』は、英国のイラストリアス級が一足先に実現したが、我が国は本艦と『大鳳』によって、その課題に答を出した」

「我々も、艦に恥じぬ働きを見せねばなりませんね。満足な戦果を上げられなかったら、『信濃』は『仏作って魂入れず』の見本になってしまいます」

松島の言葉を受け、志賀が三人の大隊長の顔を等分に見た。

「頼もしい限りだ。後は、決戦までにどれほど技量を向上させることができるか、だな」

2

「問題は、敵がいつ、どこに来るかだ」

連合艦隊司令長官沢本頼雄大將は、作戰室に参集した幕僚たちを前に、よく通る声で言った。

昭和一九年九月現在、連合艦隊司令部は、横須賀鎮守府の司令部庁舎に仮住居を置いている。

連合艦隊は、長く帝国海軍最強の戦艦に将旗を掲げることを伝統として来たが、軍令部を始めとする関係各部署との協力を円滑に進める必要性を考慮して、陸に上がったのだ。

「軍艦に将旗を掲げての陣頭指揮が、連合艦隊の伝統である。陸上からの指揮など、以ての外」

連合艦隊司令部の幕僚にも、海軍中央にも、そのように主張し、反対する声があった。

これに対し、政務参謀の岡崎勲中佐が、

「明治の御世ならともかく、通信が発達した現在、

G F長官が戦艦に乗らねばならないという法^{ほう}はありません。現に米太平洋艦隊の司令長官も、ホノルルの司令部から指揮を執^とっています。また、『大和』も『武蔵^{むさし}』も『長門^{ながと}』も、決戦までに燃料の豊富な南方で入念^{にゅうねん}に訓練を積み、乗員の技量を高める必要があります。G F司令部の旗艦^{きかん}に、戦艦を使う余裕はありません」

と反論し、連合艦隊司令部の陸上移転を認めさせたのだ。

作戦室では、沢本司令長官以下の幕僚^{まくりょう}たちが机を囲み、戦況図を睨^{にら}んでいる。

沢本が、退任した山本五十六大将の後を継^ついで連合艦隊司令長官に就任^{しゅうにん}したとき、太平洋における日本の支配領域は、マーシャル、ギルバート両諸島^{しやうとう}からニューギニア島の過半^{かはん}を含んだ広大なものだったが、昨年一二月に米軍の反攻が始まってからは、マリアナ諸島、トラック環礁^{かんしょう}、ビスマルク諸島、西部ニューギニアを結んだ線まで後退していた。

「軍令部は、米軍の来寇時期^{らいこうしき}を十一月と見積^{みづ}もっている。我々はそれまでに、米軍の目標を見定^{みさだ}め、迎撃準備を整えなくてはならない」

参謀長の酒卷宗孝少将^{さかまきむねたか}が、沢本の後を引き取った。三月のメジエロ沖海戦で、マーシャル諸島メジエロ環礁の米軍基地を壊滅^{かいめつ}させた後、中部太平洋における米軍の攻勢は鎮静^{うんせい}化している。

六月末までに、ウエーク島、ナウル島、エニウエトク環礁が敵の手に落ちたものの、以後は大規模な動きがなく、日本軍はトラック環礁、マリアナ諸島を最前線として米軍と対峙^{たいじ}している。

航空機と潜水艦^{せんすいかん}による偵察の結果、米軍はクエゼリン環礁に新たな前進基地を建設していることが判明したが、燃料、弾薬の補給を主目的としたものであり、メジエロほど大規模な根拠地^{こんきょち}の機能は持たないようだった。

一方、ニューギニア、ラバウル方面では、米軍の動きが活発化している。

ニューギニアでは、同地の守りに当たる第一八軍が、米豪軍の猛攻を受け、陣地の放棄と後退を余儀なくされた。

北東部のラエ、マダン、ウエワクが次々と陥落し、現在は蘭豪国境のホーランディアで、米豪軍と対峙している状態だ。

第一八軍の支援に当たっていた第七飛行師団も消耗し、この六月に解隊した。

二年前は、ポート・モレスビーに基地航空隊が進出し、珊瑚海に睨みを利かせていたことが、今となっては夢のようだ。

ラバウルにも、昔日の姿はない。

ソロモン諸島に設けられた米軍航空基地からの空襲が激化し、飛行場や港湾施設、市街地の被害が急増したのだ。

ラバウルの第一一航空艦隊と陸軍の第六飛行師団は、懸命の防戦を続けたが、米軍の猛攻の前に消耗を重ねた。

大本営はやむなく、ラバウルからの航空兵力引き上げを決定し、同地には地上部隊のみが残された。

航空部隊の撤収後、米豪軍のラバウル上陸が予想されたが、九月現在、同地への直接侵攻はなく、米軍航空部隊による爆撃が繰り返されるだけだ。

ラバウルの守りに当たる第八方面軍は、海軍の地上部隊も含めて九万の兵力を擁し、同地に堅固な要塞を構築すると共に、自給自足の態勢を整えている。

米豪軍は、九万の地上部隊と正面から戦うことを避け、ラバウルを封じ込めるだけに留めたのだらう、と大本営は睨んでいた。

「米軍はラバウル、トラックを置き捨て、ニューギニアからフィリピンか蘭印を狙うのではないか」
大本営では、そのような意見が優勢だが――。

「米軍が、フィリピンないし蘭印を狙う可能性はありますが、今すぐではないと考えます。ニューギニアの米軍が西進し、フィリピン、蘭印をうかがう動

きを見せれば、我が軍は側面を衝くことが可能です。

そのことは、米軍も予測しているでしょう」

作戦参謀の山本祐二中佐が、ニューギニア北岸の

ホーランドディアを指しながら意見を述べ、首席参謀

高田利種大佐、航空甲参謀樋端久利雄中佐、戦務参

謀鷹尾卓海中佐らも賛意を表明した。

「米軍は指揮官の立場上、フィリピンを狙って来る

というのが、参謀本部の考えです」

陸軍参謀の吉川平三大佐が異議を唱えた。

紺色の第一種軍装に身を固めている海軍士官の中

に、カーキ色の軍服を着た陸軍軍人が混じっている

と、それだけで異彩を放つ。

「ニューギニア方面で米軍の指揮を執っているのは、

開戦時の米比軍司令官ダグラス・マッカーサーです。

彼はフィリピンから脱出した後、米国民やフィリピン

人に『私は必ず帰って来る』と約束しています。

マッカーサーは自己顕示欲の強い人物であり、その

性格上、フィリピン奪還を悲願にしていると考えま

すが」

「マッカーサーの意志だけで、太平洋方面の米軍全

てを動かせるわけではありません。フィリピン奪回

を焦って、我が軍に側面を衝かれるような真似はし

ないと推測します」

岡崎が、吉川に反論した。

「ニューギニア方面でなければ、中部太平洋か」

沢本が、戦況図を睨んだ。

中部太平洋における日本軍の最前線基地はトラツ

ク環礁だが、同地はクエゼリン環礁からの空襲圏に

入るため、艦隊の泊地としては不適當になった。

現在、トラツクの守りに就いているのは、内南洋

の警備を担当する第四艦隊司令部と哨戒用の小型

艦艇、ラバウルから後退させた戦闘機隊だけだ。

その戦闘機隊も、零戦が八〇機程度であり、多数

の空母を擁する米軍の機動部隊が襲いかかって来た

ら、ひとたまりもない。

海軍では決戦兵力として、新たな基地航空部隊

「第一航空艦隊」を編制し、内地で錬成に当たつて来た。

攻撃よりも防御に重点を置いた部隊で、装備機数四五二機のをとんどを戦闘機、偵察機が占める。

同部隊をトラックに派遣すれば、米軍の新たな攻勢に対して戦線を支えられると考えられたが――。

「敵の来寇場所は、トラックよりもマリアナ諸島の可能性が高いと考えます。マリアナ諸島が米軍の手に落ちれば、帝都を含む我が本土の大部分が敵の空襲圈に入ります」

岡崎が発言すると共に、広域図に歩み寄った。

米軍の新型重爆撃機ボーイング B 29 スーパーフォートレス——九トンの爆弾搭載量と四〇〇〇カイリ以上の航続性能を持つ、恐るべき機体の情報が伝えられて以来、司令部の最も目立つ位置に貼られているものだ。

サイパン島を中心に、半径一五〇〇哩の円が描かれ、北海道を除く日本列島の大部分——九州、四

国の全域、本州の秋田、岩手あたりまでが円内に含まれる。

「本土に B 29 が頻々と来襲するようになれば、我が国が受ける衝撃は、一昨年四月の本土空襲の比ではありません。米政府にとつても、政治上の効果が絶大であることは、申し上げるまでもありません」

「トラックを飛ばしてマリアナに来るといふのかね？ 敵の指揮官は、トラックの我が軍に背後を衝かれる危険を考えないだろうか？」

酒巻の疑問に、樋端航空甲参謀が答えた。

「敵がマリアナ攻略にかかる場合、準備攻撃として、トラックに大規模な空襲を敢行するでしょう。航空機も艦船も出撃できない状態に置いてしまえば、トラックは脅威になりません」

「ならば、一航艦をトラックに配備する手もあるな。敵がトラックに準備攻撃をかければ、大規模な迎撃を受け、艦上機を消耗する。そこに機動部隊が攻撃をかければ、敵艦隊を撃滅できる」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。